〔科目名〕	〔単位数〕	〔科目区分〕
哲学Ⅱ	2 単位	教養科目

〔担当者〕	〔オフィス・アワー〕	〔授業の方法〕
大森 史博 Ohmori Fumihiro	**時間:**講義開始時に指示する **場所:**613 研究室	講義

〔科目の概要〕

現代哲学の主要なトピックをとりあげ、そこでとり沙汰される諸事象について、それらがどのような意味で哲学の問題として問われているのかを吟味し、考察をすすめる。こうした「事象」と「問い」の吟味と考察をとおして、われわれの世界経験についての理解を掘り下げてゆきたい。

国内外の哲学者の著作のなかからテキストを抜粋して読解をおこない、「思考」、「世界」、「自己」、「身体」、「他者」、「贈与」、「生死」といった諸概念を、日常の具体的な経験に即して捉えなおすことへと向かう。

哲学とは「問い」の提起であり、「問い」を提起することは、哲学の歴史を担う運動である。

ただ概念を受容することにとどまらず、その意味を再考し、表現にもたらし、また、あらたな「問い」を提起するという本来の哲学の営為に参加することへと向かいたい。

〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕

春学期の「哲学Ⅰ」は西洋哲学の歴史を軸としたベーシックな講義である。それに対し、この秋学期の「哲学Ⅱ」は現代哲学のトピックともなる諸問題の考察を軸として展開する。

哲学は「知を愛する」ということ、つまり事象についてのあくなき探求を意味する。

探究という、そのこと自体は、もちろんどのような分野にも共通する学究の根本的な態度にほかならない。それぞれの学問の根本には問いがある。その意味では、哲学の営みは、いかにも素朴な知の探求のようにもみえる。

大切なことは、自分自身の問いをもち、事象の核心に向かい、根本に遡って探求をすすめることであろう。そうした機会は、じつは日常生活のなかには、とても少ない。だが、それこそが学問の本来であるだろう。

哲学に固有の「問い」とは何だろうか。そう思われるかもしれない。ここで、先ずもって気づかなければならないことは、学問領域の区分や棲み分けなどが問題ではないということだ。むしろ、これまで十分に考えずにきてしまったこと、これまで問わぬままに過ごしてきた事柄に探求の目を向けること、それこそが肝要な点であろう。

この授業が企図するところは、そのように自らのうちに生起する「問い」を掘り起こすことである。受講者もまた、既存の学説や概念を習い覚えるだけでなく、自ら考えることを楽しみ、自分の「問い」を見出すことを試みて欲しい。

〔科目の到達目標（最終目標・中間目標）〕

中間目標:

問われている哲学の「問い」の意味を理解し、関連する文献を読み解き、解釈することができる。

最終目標:

学び覚えた哲学の諸概念を駆使して、経験する事象を捉えなおし、「問い」を提起して考察を深めることができる。

〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕

分からないこと、気になること、理解できないことについて、質問を受ける態勢はつねに用意されています。こうした大学での学びの機会を存分に活かして下さい。学ぶべき事柄を、分からないという一言で退けてしまうのは、非常にもったいないことです。その分からないという一点を、思考の始まりに据えましょう。素朴にみえる哲学の問いも、掘り下げて考察をすすめれば、難解さや複雑さは当然ともなうことになります。そうした考察を、哲学を学ぶ面白さに変えていくことができるよう努力を重ねていきます。今年度は、参加者がじっくり考え、対話し、論述する時間を確保できるよう構成を組み換えました。

〔教科書〕

使用しない。プリントを配布する。

〔指定図書〕

なし

〔参考書〕

『オイディプス王』、ソポクレス著、藤沢令夫訳、岩波書店、1999 年
『生きることに責任はあるのか 現象学的倫理学への試み』、吉川孝ほか著、弘前大学出版会、2012年
『贈与の系譜学』、湯浅博雄著、講談社、2020 年
その他、授業のなかで紹介する。

〔前提科目〕

前提科目はない。春学期に開講の「哲学 I」と秋学期に開講の「哲学 II」は、各々が独立に完結する授業であり、どちらを先に履修してもよいし、どちらか一方だけを履修してもよい。

〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)

レスポンスカードやワーキングシートの記述、授業への参加(50%)、学期末の課題(50%)

〔評価の基準及びスケール〕

A:80 点以上
B:80 点未満 70 点以上
C:70 点未満 60 点以上
D:60 点未満 50 点以上
F:50 点未満

〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕

思考に負荷をかけること、そこにこそ探究の面白さがあるにちがいない。
自ら問いをもつこと、自ら考えることを本来として、焦らず、ねばり強く、授業に参加して欲しい。
授業スケジュールや各回の進度、扱う内容は、参加者の関心や理解に応じて変更することがある。

〔実務経歴〕

該当なし

授業スケジュール

第 1 回	テーマ(何を学ぶか):哲学はどのような学問か 内　容:オリエンテーション、授業の趣旨と進め方、学習の課題と評価についての説明 教科書・指定図書
第 2 回	テーマ(何を学ぶか):「考えること」を考える① 内　容:「考えること」についての考察の試み 教科書・指定図書
第 3 回	テーマ(何を学ぶか):「考えること」を考える② 内　容:相対主義と多様性について 教科書・指定図書
第 4 回	テーマ(何を学ぶか):贈与論の哲学① 内　容:贈与がなぜ哲学の問題になるのか 教科書・指定図書

第5回	テーマ(何を学ぶか):贈与論の哲学② 内　容:お菓子と悪戯 教科書・指定図書
第6回	テーマ(何を学ぶか):贈与論の哲学③ 内　容:贈与と交換、考察・哲学対話の試み 教科書・指定図書
第7回	テーマ(何を学ぶか):贈与論の哲学④ 内　容:生命と循環の思考、ワーキングシート仕上げ 教科書・指定図書
第8回	テーマ(何を学ぶか):自己知についての哲学① 内　容:私がなぜ哲学の問題になるのか、「汝自身を知れ」という格率、「私とは何か」という問い 教科書・指定図書
第9回	テーマ(何を学ぶか):自己知についての哲学② 内　容:デカルト哲学の再考、コギト命題の意味 教科書・指定図書
第10回	テーマ(何を学ぶか):自己知についての哲学③ 内　容:沈黙と表現、考察・哲学対話の試み 教科書・指定図書
第11回	テーマ(何を学ぶか):自己知についての哲学④ 内　容:独我論と世界概念、ワーキングシート仕上げ 教科書・指定図書
第12回	テーマ(何を学ぶか):身体についての哲学① 内　容:身体がなぜ哲学の問題になるのか 教科書・指定図書
第13回	テーマ(何を学ぶか):身体についての哲学② 内　容:身体と衣服とファッション 教科書・指定図書
第14回	テーマ(何を学ぶか):身体についての哲学③ 内　容:自己と他者の問題圏、考察・哲学対話の試み 教科書・指定図書
第15回	テーマ(何を学ぶか):総括 内　容:生と死と哲学、メメントモリ 教科書・指定図書
試 験	